図書館だより

埼玉県立図書館

32号

（埼玉県広聴広報課提供）

県の花「サクラソウ」

サクラソウ科に属する多年草で、川のほとりなどの低湿地に生え、春四月の中旬頃から五月上旬頃まで、ピンクの可憐な花を咲かせる。

かつては、荒川流域に広く自生していたが、現在では浦和市田島ケ原だけが唯一の自生地として、大正九年に天然記念物に、さらに純日本的な花の美しさ、大都会に近く、平地にはまれな大群落地、花の色や形など変異性に富み、学問的にも貴重な研究資料ということから、昭和二十七年に田島ケ原に自生する他の野草と共に花の国宝ともいうべき国の天然記念物の指定を受けている。

埼玉百年を記念して、昭和四十六年に「県の花」として制定され県民から親しまれている。

昭和62年7月1日　編集・埼玉県立図書館広報委員会　発行・埼玉県立浦和図書館　館長　杉山泰之　浦和市高砂3－1－22　☎（0488）29－2821

公共図書館長に何故なったか

戸田一雄

「縁」というものがある。よく結婚披露宴で「縁あってご両人は…」という言葉を聞く、人生は「縁あって」の連続で成り立っているのかもしれない。それは濃い時もあり、薄い時もある。長い時もあり、短い時もある。感動的なものもあり、そうでないものもある。従順な縁もあるが、厄介なものもあり、逃げ回る羽目になる時もある。縁に逆らってみても無駄な足掻きの時もある。嬉しさの余りとびつきたい時もある。縁を作ろうと必死になる人もいる。切れる縁もあり、切れぬ縁もあり、切るべき縁もある。くされ縁という言葉はよきにつけ、悪しきにつけ使われる。まったく奇妙な代物である。特に人間の意志や考えや感情を超えて突然やって来る時がある。この意外性の中に案外人生の方向を決めてしまうものがある。

昭和五十一年十二月二十日月曜日の昼過ぎ、地下鉄銀座線浅草行が上野駅を発車して間もなくのこと。何気無く反対側の座席に目を遣る、と同時に前方の人と目が会う、互に驚きの表情を瞬時に示した。そして懐しさを込めて軽く一礼を交わした。一呼吸して私はその方の隣りに席を移した。互に無沙汰の挨拶をした後、近況の話となった。やがて「実は新座市で図書館を作るので、館長を探しているのだが、中々適当な人が見つからなくて困っているのだ。」数秒の沈黙の後、「ところで君やってくれんか。」全く突然の言葉だった。が面喰うことはなかった。その日の朝、何か転職といったようなことが起こりそうな予感がしていたのである。不思議である。すぐに「やりましょう」と言ってもよかったが、何故か「考えさせて下さい」と返事をした。やはり大人として当然である、慎重に判断した結果を見せる必要があるし、又こういう時はやはり常識的な答えをするのが礼儀でもあると咄嗟に考えたからであろう。

田原町駅を降り、歩む二人の間には決定したといった雰囲気が漂っていた。転職を決めるにしては余りにも静かな心であった。二人の間には久しく音信不通が続き、その中での邂逅なのだが、新座市への縁は瞬時に時間を超越し、心を通わせたのである。やがて二人は東京本願寺に着いた。故椎名六郎氏の葬儀が行われるのである。（氏は新しい図書館学を標榜して活躍された方であるが、氏と私がある石油会社の依頼で、その会社の研究所の図書館づくりをしたことを知る人は少ないと思う。二十六才の私は未熟だったが全力をあげて頑張った。結果は企業体の図書館として高い評価を得ることが出来た。悪戦苦闘であったが、いい勉強になった。この苦労が後年新座市の図書館建設に大いに役に立ったのである。なおこれが縁でこの石油会社に無試験入社となったのである。）

東京本願寺からの帰路の記憶はない。駅まで先刻故人となられた裏田武夫東大教授（当時）と三人だったこと以外は。（先生とは日本読書学会の読書調査の仕事を一緒にしたことがある。場所はスポンサーの朝日新聞社の一室で。特に思い出すことは、当時（昭和三十三年頃）はクリスマス・イヴの銀座は浮かれた人、人の洪水で、車道も人間集団の大波に揺れていた。先生と我々仲間も当時の世相の一端に紛れもなく参加したのである。懐しい。）

昭和五十二年一月二十八日金曜日、タクシーは新座市役所に着いた。市長室で、小船市長、田中助役、並木教育長の三氏にお目にかかった。これが図書館長採用の面接であった。即刻内定した。これで高校教師の職を辞することになったのである。同年四月一日付で、地方公務員になった（公民館長兼図書館準備室長）。あの日あの時、地下鉄で伊東正勝先生（当時新座市教育委員）に遇わなかったら、新座市の図書館長は別の方がされ、私と違った運営がなされたわけで、これを思うと興味を感じないわけには行かない。その伊東先生は既に亡くなられてしまった。又小船市長と並木教育長も故人になられてしまった。私にとってこの御三方から、立派な図書館活動をしていると認められたことは望外な喜こびである。

私が図書館学を学んだのは文部省図書館職員養成所である。偶然に入所することになったのである。友人の家を訪れた時、「螢雪時代」が転っていた。頁を捲ると、授業料無料という魅力ある学校が載っていた。これが文部省図書館職員養成所であった。就職のない時代であり、図書館なら本でも読んでいればいいんだろうという安易な気持から受験し、合格した。この養成所の所長が伊東先生であった。先生は講義はなかった。私はどういうわけか時折所長机の前の椅子に腰掛け、お茶を吸りながら、先生と話をした。内容は覚えていないが、この渋茶が後年新座市へ結びつけたわけで、愉快である。

私は公共図書館の利用者としては落第である。高校時代友達と焼いもを買って図書館に行き、閲覧室を食堂兼談話室ちょっぴり勉強部屋として使わせてもらった経験と養成所の隣りの上野図書館で少々調べもの（食堂は毎日利用）をした位である。現在住んでいる町も、公共図書館不在であり、公共図書館と縁のない人間である。それがどうしたことか縁あって公共図書館長になるというから不思議である。引受ける方も引受ける方かも知れないが。更に公共図書館側から反撃を受けそうなことがある。昔のことだけれど、昭和三十五年の全国図書館大会（於福島市）の感想を求められ、掲載された（図書館雑誌第五十四巻第九号）。企業体図書館員の立場からではあるが、「読書会がどうの、母親文庫がどうしたの……小説を読む会的な報告を聞かされるのでは、たまったものではない」とか、「私の図書館は、一頁の文献の複写であり、一枚の機械のカタログの整理であり、冷徹な資料の検索であり調査であり……公共図書館的なものを全く拒否した形で存在している」などと書いている。この私が公共図書館運営に携わることになったわけで、そこには従来の公共図書館的発想と違う点が多々出て来ることは当然であったと思われる。

ある風の吹きまわしで、新座市で働くことになり、女子高校生の涙に送られて学舎を後にしたのが十年前。早いものである。そして沢山の方々から及第点の頂ける図書館だったようで、嬉しさと感謝の気持で一杯である。また埼玉県の図書館界に微力ながらお手伝いが出来、更に全国図書館大会（浦和市）の発表で知己を得たことも有難いことだと思っている。この館長としての十年間は、私に掛替えのない経験を授けてくれた。今後の人生の貴重な糧となると思う。それからこの公共図書館勤務で、全種類の図書館（専門、大学、学校、公共）の経験をしたわけで、全国唯一人かも知れない非常に幸運な男でもあると思っている。

公共図書館長として、まだまだやりたいこともあるけれど、次の「縁」故に三月三十一日付でこの職を辞すことにした。（国士館大学助教授・前新座市立中央図書館長・嵐山町在住）

県内図書館めぐり

川島町立図書館

川島町は、人口約二万人を数え、その多くは西の中山地区から、川越へ向かう国道二五四号に沿う伊草地区に分布しています。地形は平坦で田園の広がる純農村地域といえるでしょう。

当町では、古くは県立図書館による移動図書館の巡回が六ケ所で行われており、また公民館活動の一環として、昭和五十六年からコミュニティ・センター内に図書室が開かれ、毎週日曜日に図書の貸出しが行われてきました。さらに家庭文庫の活動も盛んで、現在では町内に六文庫あり、これら住民の読書に対するニーズが図書館の建設につながったものと思われます。

昭和五十九年、より充実した図書館サービスを目指して図書館の建設が決定され、六十年度文部省補助金の申請、交付を受けて六十一年三月に竣工しました。

町の文化・社会教育施設の集まる中心地に位置した建物は、一階には児童書、小説を主とする文学関係図書、新聞・雑誌コーナーを配し、小説以外の一般書は、二階に配置されています。

児童書コーナー

一階作業室の奥には移動図書館用書庫とプラットホームが既に設置され、将来は移動図書館車による巡回も計画されるなど、より身近な図書館へと、サービス計画が進められています。

施設の概要

構造　鉄筋コンクリート造二階建
延床面積　八六七㎡
所蔵資料
　図書二万五千冊
　雑誌六十誌　新聞五紙
所在地　比企郡川島町下八ツ林九〇一
TEL　〇四九二―九七―六〇三〇

埼玉の文学

埼玉の歌人 ①

三ケ島 葭子

其ノ一

埼玉の生んだ近代短歌の代表歌人に三ケ島葭子がいる。葭子は本名よし、明治十九年八月七日、入間郡三ケ島村字堀之内（現・所沢市）に、父寛太郎、母さわの長女として生まれた。父は同地の小学校長であった。二十一年、父の転任により秩父郡槻川村（現・東秩父村）へ移住。二十二年、入間郡小手指村北野（現・所沢市）に移住。二十三年に弟栄一が生まれる。二十五年四月、母が肋膜炎で死去。小手指村尋常小学校へ入学する。十一月、継母のぶが小暮家より入る。二十六年、父の転任により児玉郡児玉町に移住。二十七年、弟一郎（後の俳優左卜全）が生まれる。二十九年、児玉町小学校尋常科を卒業し、高等科に入る。

明治三十年、十一歳で歌作を始める。百人一首の註釈本などを読み、七五調で日記を書きはじめる。葭子の文学への目覚めである。児玉町の近く、美里村広木の薬師のほとりに万葉遺跡「曝井」があり、「御所内」は防人の館跡、その妻大伴部真足女の歌は万葉集に収められている。その後、児玉党の祖小野篁の子孫、塙保己一が保木野に生まれ、古史古文の研究に偉大な足跡を残している。その児玉町で、葭子は短歌をはじめたのである。この年、妹その子が生まれる。三十三年、児玉町小学校高等科を卒業、一時、継母の実家小手指村北野の小暮家に寄寓、上京して青山女子学院に通う。古今集、新古今集、狂歌などを読む。三十四年、妹千代子生まれる。三十五年、埼玉県女子師範学校乙種講習科へ入学、寄宿舎へ入る。三十六年、一家東京府南葛飾郡船堀村（現・東京都）へ転住。三十七年、女子師範学校本科に転ずる。「帝国文学」を愛読する。夏頃より肺結核の兆候があり、十一月に至り休学。船堀村の自宅で療養する。三十八年九月、病勢つのり卒業を目前にして退学する。弟精一生まれる。

明治四十一年、病癒え、東京府下西多摩郡小宮村（現・五日市町）尋常小学校に代用教員として赴任する。月俸十一円であった。四十二年四月、「女子文壇」に初めて短歌を投稿し、一首掲載される。その短歌、

けさ雪はしろがねのこと枯草のかわきし上ぞかがやきにける

大正四年、膀胱炎にかかり快癒したが、これから諸病が続発、生涯を病苦のうちに終った。歌作は次第に減少。小説を「早稲田文学」「ホトトギス」等に発表する。夫の失職が長く赤貧を極める。「青踏」（四年八月）に、

鈴ふればその鈴の音を食はむとするにやあわれわが子口あくの歌がある。十月、夫が大日本水産会に奉職する。五年四月、血痰を見る。娘みなみを所沢の舅姑にあずける。八月、養生のため宮城県黒川郡宮床村の原阿佐緒の家に四十日滞在する。六年九月、島木赤彦を雑司谷に訪う。十月以降「アララギ」に歌を発表する。

大正七年、原阿佐緒から石原純との恋愛問題の相談を受け宮床村へ行く。九年、夫が水産新報社経営のため下阪。葭子は病弱のため独り東京に残る。十二月、大阪に行き夫に愛人のいるのを知る。十年二月、処女歌集「吾木香」を自費出版する。葭子生前唯一の記念すべき歌集であった。六月、「婦人公論」に原阿佐緒と石原純の恋愛事件について発表、島木赤彦の怒りにふれて破門される。以後古泉千樫の門に入る。

大正十一年一月、父寛太郎死去。二月、心臓に故障を生じラッセルがある。四月、夫が大阪より愛人を伴って帰り、二階に夫と愛人、階下に葭子という、悲しい女の屈辱の生活があった。

これの世にあるべきことと思ほへずわれの怒りのなんぞ小さき

これの世に命ながらへ見るまじきものこそひにわが見たりけれ

障子しめてわがひとりなり厨には二階の妻の夕餉炊きつつ

哀しい妻の歌である。

（日本ペンクラブ会員　榎本　了）

東西南北 7月～9月の主な催し物

■県立浦和図書館

●科学文化映画会
日時　7月18日(土)　14時
内容　「海」「絵伝日本の船」「白鳥たちよ永遠なれ」

●郷土を知る映画会
日時　7月30日(木)　14時
内容　「ファミリーハイキング」他
日時　8月27日(木)　14時
内容　「うちわまつり」「埼玉の金魚錦鯉」他
日時　9月12日(土)　14時
内容　「渋沢栄一」「塙保己一」他
日時　9月24日(木)　14時
内容　「秩父の石仏―そのユーモアと庶民のねがい」「さきたまの仏像をたずねて」他

●夏休み子供映画会
日時　8月6日(木)　14時
内容　「親子パンダの物語」「虔十公園林」
日時　8月20日(木)　14時
内容　「がんばれスイミー」「ねずみのチャップ」他

■県立熊谷図書館

●児童文化講演会
日時　9月21日(月)　13時半～15時半
会場　埼玉県熊谷福祉センター
講師　櫻井美紀氏
演題　子どもに語りを―子どもの心を豊かに育てるために―
※先着100名

●名作映画鑑賞会
日時　7月4日(土)　10時・14時
内容　「潮騒」
日時　8月1日(土)　10時・14時
内容　「この子を残して」
日時　9月5日(土)　10時・14時
内容　「秋刀魚の味」

●定例映画会
日時　7月17日(金)　15時
内容　「穂高は生きている」他
日時　8月21日(金)　15時
内容　「核戦争後の地球1・2」
日時　9月18日(金)　15時
内容　「ちひろの四季」他

●夏休み子ども映画会
日時　7月24日(金)　10時・14時
内容　「新・子鹿物語」他
日時　8月25日(火)　10時・14時
内容　「親子パンダの物語」他

●夏休みビデオ映画会
日時　7月28日(火)　10時
内容　「サウンド・オブ・ミュージック」

■県立川越図書館

●名作映画会
日時　7月11日(土)　10時・14時
内容　「青葉学園物語」

●夏休み子ども映画会
日時　7月28日(火)　10時・14時
内容　「いじわる狐ランボー」「やさしいライオン」「がんばれスイミー」
日時　8月6日(木)　10時・14時
内容　「ひつじのようなライオン」「山ねずみロッキー・チャック」「くまの子ウーフ」
日時　8月20日(木)　10時・14時
内容　「ピーターと狼」「べっかんこ鬼」「ツルの舞踏会」
日時　8月27日(木)　10時・14時
内容　「雄牛のフェルディナンド」「お月さんももいろ」「南極犬タロ」

■県立久喜図書館

●夏休み子ども映画会
日時　7月30日(木)　10時・13時半・15時
内容　「お月さんももいろ」他
日時　8月20日(木)　9時半・11時・13時半・15時
内容　「ムーミン総集編」

●夏休み親子映画会
日時　7月29日(水)　9時半・11時・13時半・15時
内容　「ダンボ」
日時　8月27日(木)　13時・15時
　　8月28日(金)　9時半・13時・15時半
内容　「ユニコ」

●大人も子どもも青少年も名画鑑賞会
日時　8月7日(金)　9時半・13時・15時
内容　「青葉学園物語」

●名画鑑賞会
日時　9月26日(土)　10時・13時半
内容　「鉄道員」

全ての催し物は無料です。
会場の記入がない場合、いずれも主催館（■印）が会場です。詳細は県立各館へおたずねください。

県立浦和(0488)29－2821　県立熊谷(0485)23－6291　県立川越(0492)44－5602　県立久喜(0480)21－2659

読書グループの紹介

一葉会

羽生市読書会

羽生市ゆかりの田山花袋著「田舎教師」を第一回の課題図書として、昭和45年10月に会が誕生しました。

毎月課題図書を中心にしての話し合い、文学散歩、講師の先生を招いての古典講座と活動の輪が広がり、昭和55年10月より、元大東文化大学教授西尾能仁先生を講師に、「一葉日記」をよみ始めました。

先生の著書、全釈「一葉日記」をテキストに、講義二時間、課題図書を中心に、討論を一時間致します。

明治24年より29年までの一葉の日記のうち、只今は明治26年、竜泉寺町時代の貧しく厳しい暮しの中で、次第に自己を確立していった一葉に私達は、同じ女性としての共感と、新鮮さを感じます。

西尾先生の一葉に対する深い理解と、情熱を秘めたお話に、7年が早くすぎ、これからも先生のおいで頂ける限り、一葉日記を読み続けていきたいと思っております。

(西尾先生を囲んで)

文学散歩も打木村治著「天の園」を読んで、東松山、唐子地方、桜の季節に、京都・奈良等、歴史と文学のふるさとをたずねております。

課題図書の話し合いも楽しく、いつしか自分達の生き方と照し合せて話しがはずみます。

会員待望の新装なった図書館もできまして、私どもの会に温かいお力添えを頂いております。

黒一点の男性会員を含め現在19名の会員で運営しております。

羽生の地に縁あって、17年間の伝統ある読書会での出会いを大切にしていきたいと思います。

（小林芳子）

子ども達とともに——
いづみ文庫

春日部市

清らかないづみの流れを、すぐれた本を通して子どもの心の中に送ることができたら——そんな願いをこめてつけた「いづみ文庫」も、今年の9月で6年になります。その間、二百人余の子どもが顔を見せ、文庫の本を手にしてひとときを過ごしていきました。

いづみ文庫と共に歩んできたよしえちゃんは、今年の四月、中学生になりました。文庫の日にはかかさず顔を見せてくれる常連の一人です。絵本から物語まで、文庫の本を一番利用したのもよしえちゃんだったのではないでしょうか。春休み、仲良しのゆう子ちゃんと一緒に文庫に来て「中学生になると部活が忙しくて文庫にも来れなくなると思うので、これはお世話になったお礼です。」と紙袋を置いていきました。袋を開けてみると、中には砂時計とチョークとティッシュが入っていました。チョークは文庫に来る子ども達がいつも黒板に落書きをしていくので、その時使うように、砂時計は時間をはかる時に、ティッシュは自由に使って下さい、と。よしえちゃんのやさしい心に感激！　そこで二人の新しい門出を祝してジュースで乾杯しました。子ども達の思わぬやさしさに触れた時、子ども達の心に文庫が根づいた時、一番嬉しい時です。

利用者は二十名前後ですが、子ども達はすっかり打ちとけて「クラスの先生こわいんだよ。でも時々シャレを言うけどね。」などと、しばしおしゃべりをし、黒板にいたずら書きをして、時間になると本の入った袋をもって帰っていきます。

いづみ文庫に来るのを楽しみにしている子ども達に、これからも続く限り、子どもと本との橋渡しをしていこうと思っています。小さないづみの流れが、やがて大河となるように——。

（長井洋子）

(文庫の風景)

本のひろば

埼玉の文学散歩関係文献

——県人著作による——

最近各地で文学散歩が盛んになり、グループでお出かけになっていろいろ学ぶことは楽しいものです。そこで今回は、県人著作のうち、県内外の文学散歩に関するものを集めてみました。豆本あり謄写刷ありで、現在入手しにくいものが多くなりましたが、参考としてご覧ください。

なお、この資料作成にあたっては小林鶴男氏（岡部町在住）の御協力を得ました。

記載は、刊年の古いものから、書名、著編者、出版者（著編者と同じものは省略）、出版年、所蔵館の順とし、所蔵館名のないものは小林氏の所蔵となります。

埼玉文学散歩　榎本了著　東松山文学散歩友の会　一九六四　[浦]

武者小路の新しき村をたずねる　加須市民読書会　一九六五

田山花袋「田舎教師」文学散歩のしおり　加須市民読書会　一九六六

吉田の万葉歌碑　山口平八著　吉田町教育委員会　一九六六　[浦・熊・久]

文学遺跡めぐり　浦和市教育委員会・浦和市教育研究会国語部　一九六六～一九六七（合本）　[熊]

上州路に近代詩のふるさとを訪ねて　埼玉県読売ブッククラブ　一九六八

埼玉文学探訪　朱楼芸文会編　紅天社　一九六九　[浦・熊・川・久]

初夏の武蔵野と近代文学館をたずねて　県立図書館・川越市立図書館・読売ブッククラブ　一九六九

初夏の墨田川界隈に古きよき文学のふるさとを訪ねる　加須市民読書会　一九六九

文学の旅　秋谷豊著　吉川書房　一九七〇　[熊・川・久]

花袋のふるさとをゆく　埼玉県読売ブッククラブ・熊谷市立熊谷図書館　一九七〇

古代文化のふるさとをゆく　加須市民読書会　加須市立図書館　一九七一

木曽路をゆく　埼玉県読売ブッククラブ　一九七一　[浦]

ちちぶ散歩みち　—うたと今昔—　坂本時次著　ちちの木会　一九七一　[浦・熊]

さいたま文学散歩　埼玉県民生部青少年課編　埼玉県青少年育成埼玉県民会議　一九七一　[浦・熊]

埼玉の文学めぐり　関田史郎著　富士出版　一九七二　[浦・熊・川・久]

文学散歩解説要項　本庄市立図書館　一九七二

房総文学散歩参考資料　埼玉県読売ブッククラブ　一九七二

鎌倉文学散歩　浦和市読書グループ連絡協議会　一九七二

「路傍の石」の町栃木と民芸のふるさと結城・益子を訪ねる　加須市民読書会　加須市立図書館　一九七三

信濃路文学散歩のしおり　埼玉県読売ブッククラブ　一九七三

秩父の文学紀行　斎藤廣一著　蒼神書院　一九七四　[浦・熊・川]

常陸文学散歩のしおり　埼玉県読売ブッククラブ　一九七四

しもつけ文学・歴史めぐり　埼玉県読売ブッククラブ　埼玉県立浦和図書館　一九七五

掌編埼玉文学散歩1～5　榎本了著　さいたま豆本の会　一九七五～一九七七　[浦・熊・川・久]

「掌編埼玉文学散歩」(上)と「埼玉の文学めぐり」(下)

「田舎教師」と羽生　羽生郷土史研究会編　羽生市　一九七六　[浦・熊・川・久]

大宮文学散歩　秋山喜久夫著　丸岡書店　一九七六　[熊・川・久]

写真文学碑めぐり　奥光三郎著　一九七六　[熊・川]

埼玉の文学　—その作品と風土—　秋谷豊編　さきたま出版会　一九七九　[浦・熊・川・久]

文学山歩　—私の歩んだ山と高原—　秋谷豊著　実業之日本社　一九七九　[浦・川・久]

「天の園」のふるさとを訪ねる　埼玉

県立図書館読書普及委員会編
一九七九　[浦・川]

埼玉県の文学碑　榎本了著　さいたま豆本の会
一九八〇　[浦・熊・川・久]

東京のかおり　浦和市教育研究会国語部編　さきたま出版会　一九八〇　[浦・川]

新埼玉文学散歩　上・下　榎本了著　まつやま書房
一九八一　[浦・熊・川・久]

残照の武蔵野　秋谷豊著　桐原書店
一九八一　[浦・熊・川・久]

東松山市文学散歩　―比企路の文学散歩―　森田光良編　東松山市立図書館
一九八一　[浦・熊・川・久]

芭蕉区碑を歩く　―埼玉の一〇四基―　小林甲子男著　さきたま出版会
一九八三　[浦・熊・川・久]

入間・比企地区文学散歩資料展　―文学碑を訪ねて―　埼玉県立川越図書館編
一九八三　[浦・熊・川]

ふるさとの文学　―田山花袋文学の周辺―　埼玉県立図書館
一九八三　[浦・熊・川・久]

ふるさとの文学　―秩父の文学をたずねて―　埼玉県立図書館
一九八四　[浦・熊・川・久]

深谷の芭蕉句碑　―拓本散歩―　佐藤繁著　はたご文庫　一九八四　[熊]

文学で歩くふるさと　関田史郎著　さきたま出版会
一九八五　[浦・熊・川・久]

武蔵野の万葉を歩く　芳賀善次郎著　さきたま出版会
一九八五　[浦・熊・川・久]

ふるさとの文学　―八高線に沿って―　埼玉県立図書館　一九八六　[浦・熊・川・久]

おたずねください

問　**「おっきりこみ」**とはどのような料理か、その調理法は？

答　「おっきりこみ」は『**ふるさとの味**』（吉田町産業課　一九八二年刊）によれば、〝手打うどんの仲間です。平たくいえば、おっきりこみは家庭用、手打うどん、もりは、来客用として作られました。〟と紹介されています。

『**日本の郷土料理**』（全国料理研究会柊会著　ドメス出版　一九七四年刊）では「お切こみ」として当県の郷土料理の一つとして掲げられています。小麦粉製の汁物という意味では、山梨県の名物とされる「ほうとう」等と同種のものと言えそうです。

生めんを煮込むという点では『**秩父っ言葉と民俗**』（坂本時次・堀口英昭著　木蘭舎　一九七八年刊）は、〝これはうどんの一種で上手に作るとこんなにうまいものはない。〈おっきり込み〉は、煮込みうどんとは違う〟と記しています。

調理法について、ここでは、『**さいたまの味**』（埼玉県農林部一九七八年刊）から抄出してみましょう。　※四人前

〈材料〉うどん（地粉四〇〇g　塩大さじ一杯、水）おつゆ、きのこ四〇〇g、なす五個、にんじん一〇〇g、ごま油大さじ四杯、水カップ十杯、しょうゆ一四〇cc、青菜少々。

〈作り方〉①きのこはたてざきにして塩水につけておく②小麦粉は塩水でこね、三十分以上おく③なすをたて長のくし形にうすく切ってアクを抜く④にんじんをささがきにする⑤鍋に油を熱し、きのことなすを炒め、水を加えて煮たてる⑥うどんは巾広くつくる⑦煮たった鍋ににんじんを入れ、うどんもはりつかないように入れ、箸でほぐし蓋をする⑧沸とうしたらしょうゆを入れてとろ火で五分程煮たて、火を止めてむらす⑨小さく切った青菜をちらし、アツアツで食べる。

編集後記

この「図書館だより」は、県立四館共同の広報として、各館からの編集委員により企画・編集されています。

今年度は、三館の委員が交代しましたが、フレッシュな気持で今年一年皆様の期待に応えられるよう頑張りたいと思います。

本号から「埼玉の文学」は、歌人にスポットをあて、一昨年に引き続き榎本了先生に御執筆いただけることになりましたので、御期待ください。また、前新座市立中央図書館長の戸田一雄氏には、貴重な体験を綴られた玉稿をいただき感謝申し上げます。

今年は例年になく雨が少なく、夏を迎え水不足が心配されますが、限りある自然の恵みを大切にしたいものです。